

「八月十五日に想う」



大 高 満 範

このところ、アジアへの戦後補償―従軍慰安婦問題等が取り上げられて、弁護士会でも調査にとりかかり、議論が沸騰している。我が国の戦争責任がいまだに問われ続けている。

加藤楸邨は、人間探求派の代表的俳人であるが、昭和二十一年同じく人間探求派俳人中村草田男が、楸邨の戦争責任を追求した「芸と文学―加藤楸邨への手紙」を發表したことは、俳壇では有名な論争である。

これに対して楸邨は、「俳句と人間について―草田男氏への返事」を以って誠実に応答した。

この論争は、「死ねば野分生きてゐしかば争へり」の句に読み取られるように、楸邨の良心の呵責、傷痕として残った。

唾蟬や終ることなきわが戦後

火の中に死なざりしかば野分満つ

身に沁みて死にき遺るは誘らるる

霜の石踏まれどほしの朝いたる

ある夜わが吐く息白く裏切られる

石を吹く野分や疲れてはならず

私は、八月十五日の終戦記念日にこの論争に思いをいたし、戦争の肉体のみならず精神に残す深刻な傷痕に慄然とし、人類のみならず地球の滅亡にまでいたる戦争・核兵器を地球上からなくすべく、渾身の努力を続けなければならぬと覚悟を新たにしたい。

終戦直後の状況を楸邨の次の句でしのび、平和への決意をより強固なものにしたい。

薯粥や父と呼ばれて飢多しめき

パン種の生きてふくらむ夜の霜

死や霜の六尺の土あれば足る

父に子に明日への希ひ蓮の実とぶ

〔千葉城史回顧〕



小林宏也

東京の近郊の大都市千葉には千葉地方裁判所があり、ここには四、六時中訴訟で通う。

千葉地方裁判所に行くと、その昔猪鼻城が蔽存したという猪鼻城址が目睫の間に観望することができる。猪鼻城は鎌倉時代の有名な武将である千葉氏の拠っていた城郭である。

言うまでもない、千葉氏の城郭は現在の千葉市の中央にある海拔約三十メートルの猪鼻山に存在し、千葉城とも、猪鼻城ともいわれたが正に天険の要害である。

いまここに日本城郭全集によって千葉城址を学ぶことにした。千葉氏は鎌倉幕府を開いて征夷大將軍となった源頼朝の四天王の一人であった、千葉の名は千葉氏に源を発するものである。

〔千葉城（千葉市猪鼻講園）〕

一 猪鼻山の天険の要害に居館をかまえ、周囲を土塁でかこむといった中世式の城郭で、昔はその附近は東京湾にのぞんで、西は断崖絶壁、北は都川が流れて自然の堀となっていた。東と西は台地つづきで、その間に深い谷があって空堀の役目をしている要害であった。

本丸は丘の西北隅にあって、土塁でめぐらされ、周囲は五百メートルあまり、東南には空堀が構えられていた。

この地に城を築いた千葉氏は平家の一族であるが、忠常のとき千葉を根拠地として、猪鼻山に居館をつくり、千葉氏を称した。しかし、史上に千葉氏の名称が現われ出したのは、忠常の子常将のときで、千葉介となり、代々千葉介を名乗った。その後、館は転々としてかわり、四代目の常重のとき猪鼻山に、城を築いて移った。時に大治元年(一一二六)六月。これが猪鼻城の始まりである。

城郭は縦横に多くの堀をつくってあった。大手はかなり急な坂道で石垣で組み上げてあるが、ほかは空堀まで土手で築きあげてあった。空堀の跡はいまも窪地になって残っているが、曲折する大手の坂を登ると、丘陵の西北端に本丸があったらしい。現在は小さな社があるだけだが、ここが見張所兼本丸になっていたところである。そこから南へ下るとかなり広い平坦な台地があり、当時は屋形があったところで、見晴しが非常によい。昔は西方は東京、北と東は低地で一キロあまりはなれたところの丘陵がわずかに見えるだけだった。現在は千葉市内が一望に見下ろせる。

さて猪鼻城が完成すると、城下には人が集まって大変にぎわったことは『千葉集』に記されている。

二 これから千葉氏は武威を振うようになったのだが、全盛期は常重の子常胤のころである。治承四年(一一八〇)、伊豆に兵を挙げた源頼朝は敗れて、この地で雌伏し、各地の豪族に呼びかけを行った。そのとき千葉介常胤が馳せ参じた。これがもとで房総一円の武士団はこぞって頼朝に味方することになったという。

現在、城址の大手跡に「お茶の水」という旧蹟があるが、これは頼朝を下総に迎えたとき、茶を接待したところであるという。頼朝はこれを大いに徳として、幕府を鎌倉に開くとかれを重用した。そして常胤の六人の男子には、それぞれ下総各地に城を構えさせた。これがいわゆる千葉六党である。いざというときには六人が力をあわせて敵に立ち向かったので、その地盤はますます強固なものになっていった。

三 ところが、時代が流れて常胤から十代後の満胤のころになると、この千葉六党の結束も乱れはじめた。すなわち千葉公第十四代の城主満胤に四子があった。長子の兼胤には家督を譲り、二子の康胤は常陸の大據殿へ養子にやった。ところが康胤は、大據殿に実子が生まれたので、猪鼻城へ帰ってきた。たまたま幕張の馬加城（現在の千葉市幕張町馬加）に城主がなかったので、満胤は所領を分配してかれを馬加城主とした。しかし、康胤は分家の冷飯は不満でたまらなかつた。折あらば一旗あげてやろうと斗志を燃やしていた。

まもなく、猪鼻城は兼胤から長子の胤直に移った。また関八州には足利成氏と上杉房頭の二大勢力が対立し一触即発の危機をはらんでいた。この中にいた猪鼻城はけつしてのどかではなかつた。

四 たまたま武州分倍河原で足利成氏と上杉房頭のあいだに戦端がひらかれ、足利軍が上杉軍を破つたのを見た胤直の権臣原胤房はこのときとばかりに足利成氏の援兵と馬加康胤を総大将にする軍勢で、猪鼻城を襲撃したのである。馬加康胤もこの機会を利用して本家を乗っ取るため、庚正元年（一四五五）三月二十日の夜陰にまぎれ、猪鼻城へ大挙押し寄せた。城兵たちは必死に抗戦した。その間に、重臣円城寺尚任は城主胤直の妻子をつれて多古城へ逃れた。また胤直、胤将ら父子も多古城へ亡命しさらに志摩城へ拠ったり、各地を転々とした末、八月十五日に一党ごとく自害して果てた。そこで宿願を達した康胤は猪鼻城へ入り第十七代千葉介となった。一方上杉派では実胤、自胤（胤直の側室の子で兄賢胤の遺児）の二人を市川城に入れ、千葉宗家の回復を図つたが、康胤の勢力が強く機会がやつてこないうちに千葉氏は二派に分かれてしまった。

五 さて、このころ足利幕府六代將軍足利義政は、千葉氏一族で美濃国郡上八幡城主の東下野守常縁に「康胤を追い実胤を猪鼻城主にすべし」と命じてきた。東常縁は六代千葉公常胤の六男で、千葉六党の一人国分城主の胤頼の嫡流である。常縁はさっそく三万の兵を率いて下総の国に下り、馬加城を攻めたが落城しなかつた。そこで千葉六党の末孫たちを味方に加え、ふたたび猛攻撃を加えたから、さしも難攻不落を誇つた馬加城も落ちた。このとき猪鼻

城にいた康胤父子も、猪鼻城の落城も迫ったと知り庚正二年十一月一日、搦手から抜け出して千葉寺を通って上総の八幡に逃がれた。しかし追手が急で激戦の末、康胤父子は八幡を流れる藤田川の岸辺の林間で首級を挙げられてしまった。

東常縁が美濃へ帰ったのは、それから十三年後の文明元年（一四七〇）二月であった。ところが千葉宗家を継いだ実胤は根拠地である市川城が上杉成氏に攻められ落城したので、実胤は武州石浜城に、自胤は赤塚城に移った。

六 その後千葉介は康胤の第三子輔胤が継ぎ、猪鼻城を廃して佐倉の将門山に居城を移し、代々千葉介を称して、相模の北条氏に属したが、天正十八年（一五九〇）七月豊臣秀吉の小田原攻めのときに滅亡して、名門千葉介は絶えた。

「千葉氏累世此城に居る按九代後記以此域。為常陸地者非也 源頼朝之時其先千葉介常胤始て本国之守護に補せられ、子孫相襲て此に居る。文明三年足利成氏時居古河城上杉顕定か為に破られ走て此城ニ入ル。城主千葉陸奥守康胤迎へて是を守護しける見九代。後記 永録中千葉介国胤相襲て是に居り北条氏に属す見小田原記天正十三年千葉新助都胤房総治乱記云都胤初称栗飯原久四郎按国都国訓通与小田原記。新載国胤蓋一人也然^二此明証^一今各抛^二回文^一 其臣桑田万五郎のため弑せらる。其子幼稚成^二よつて此旨北条へ申けれ八氏政の不知にて、当城を小田原より持ノ其子二歳に成とも又新介と称して当城に居住し家臣等後見して有りけるが、其年の冬証人として小田原にそ置ける。十八年神祖諸将を遣はしてこれをせめ絵ひしかハ此城遂に明退ける」。

興国元年ニハ師冬此城に抛ル。四月源顕信攻て是をやふりしかハ師冬域を焼て逃ル」。『諸国廢城考卷之十六・千葉城』



不 介 入

森
謙

世界に眼を向けると、旧ソ連内の共和国間の紛争、チェコスロバキア、アフガニスタン、ユーゴスラビア等々内戦終焉の見通しがつかない。

思うに、それらの国々はそれぞれのお国の事情があるのだから、やりたいだけやってもいい、やがて国全体が疲弊し、国破れて山河あり、となったとき、国連が泣きつかれてはじめてやおら腰をあげればよい。夫婦喧嘩は犬でも喰わぬとか。

P K Oについても、我が国は東南アジア諸国から痛くない肚をさぐられ、国内も完全な、意思統一ができていないのに、生命の危険を冒してまで任務地に派遣される本人とその家族が気の毒だ。

当分の間、不介入が賢明だと思う。